

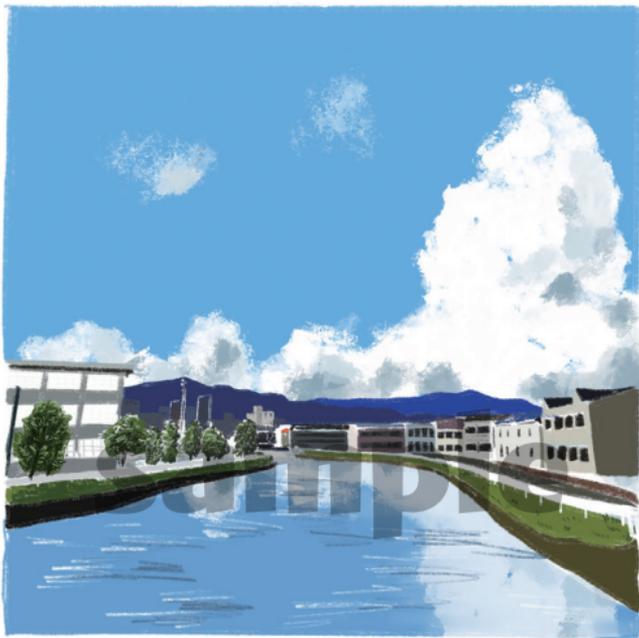
とくべつな君へ



作 / みやのん 絵 / 桜田洋

sample





僕の^{ぼく}名^な前^{まえ}はシロ。
真^まっ白^{しろ}な僕^{ぼく}の身^み体^{からだ}を見^みて、ご主^{しゅじん}人^{にん}がつけ^つけてくれ^{くれ}たんだ。
温^{あたた}かい、お母^{かあ}さん^の胸^{むね}に抱^だかれて眠^{ねむ}っていたはず^{はず}なのに、目^めを覚^さました時^{とき}には
小^{しょう}学^{がく}の横^{よこ}を流^{なが}れる大^{おお}きな川^{かわ}のそばに、兄^{あにいもうと}弟^{てい}達^{たち}と捨^すてられていた。



そして、いつの間^まにか一^{ひとり}人^{ひとり}ぼっち^{ぼっち}になった。
寒^{さむ}くて、怖^{こわ}くて、お腹^{はら}がすいて
悲^{かな}しくて・・・
弱^{よわ}々^{よわ}しい声^{こゑ}で泣^ないていた僕^{ぼく}を見^みつけてくれたのは、小^{しょう}学^{がく}2^に年^{ねん}生^{せい}のヒロくん^{くん}だった。

でも、玄關先で僕を抱いて帰ったヒロくんを見て、

お母さんは困った顔をして言ったんだ。

「元の場所に返してきなさい」

「嫌だ、僕、この子と一緒にいたい」

「生き物のお世話はとても大変なのよ？」

お散歩やご飯をあげたり、毎日きちんとやってあげないと。

お母さんのお手伝いもしないで、遊んでるヒロくんにはできるかしら？」

ポタッ。ポタッ。ポタポタポタ。

僕の頭に何か落ちてきた。

顔をあげると、ヒロくんの目から大粒の涙が溢れていた。

「ぼっ、ぼく・・・ひっく・・・お散歩も、ひっく・・・ご飯も・・・毎日きちんとやる。

約束するから。この仔犬をお家で飼ってもいい？」

泣きながらうたえるヒロくんを見て、お母さんの困った顔は、

急に優しい顔になって笑った。

「約束よ」

その日から僕は、ヒロくんの家族になった。



僕はヒロくんのお家にやってきて

ご飯を沢山食べた。そのおかげで

ヒロくんと遊んだり、散歩もできる様になった。

ヒロくんと散歩に行くのが、僕の一番の楽しみだ。

「よーし、出発進行！」

ヒロくんは好奇心旺盛で、いつもいろんなところに冒険に行くんだ。

田んぼのあぜ道や、菜の花畑。

近所の公園。



ためしよみ

は

ここまでです